

—自然と文化—文化人類学的視点から見る貧困

3. 文化人類学的視点から見る貧困

①文化人類学から見る生存条件について

レヴィ＝ストロースは、人類学の独創性は「それぞれの時代において人間性の限界とみなされている地点に立って、人間を研究する事にある¹。」として、それ故に生物学、人口統計学、経済学、社会学、心理学、哲学——との関係をめぐる一連の問題に触れる、「隙間を突く」科学であるとしている事は前述のとおりである。

神話や親族の基本構造について、レヴィ＝ストロースは自然状態から文化状態への移行をしつづけるものとしてとらえており、神話においては、火、水、狩猟、農耕の起源や、時の周期性に関して、また集団を維持する為の規制（文化）の発生を、手を変え品を変え、暗喩や転喩という、ある種の直感的な気付き、アナロジー、「象徴機能」、その発現形態として展開しているとされる。

人間の生活は、死すべき運命を知るものとして、死と言う問題と共にあって、社会を文化を生み出し、人間の生存条件は神話に網羅されているように、火、水、農耕、狩猟などの起源の中に、語られているとされる。

②生存条件を交換するシステムとしての社会と貧困

レヴィ＝ストロースは、複雑な婚姻規則を「社会を生成する交換関係（連帯）のための様々な様態として出てくるもの²」として捉えており、この論理を反転させて、婚姻規則（インセスト・タブー）は互酬的な女性の交換のためのさまざまな様態として整理している。

この考え方は、人間の社会の形成過程と社会の機能、いわば社会の基本的な形は、人間と言う種にとって、種と個体の存続のための基本的な条件（生存条件）である〔女性、生活物資、文化（言語、規制等）〕の交換をうながすシステムとして生成されたと捉えており、社会とは「交換によるコミュニケーション（連帯）の体系」とする思想といえるであろう。

そこで人間の社会とはそもそも「交換によるコミュニケーション（連帯）の体系」であると言うレヴィ＝ストロースの理解を受け入れるならば、文化状態となり、すでにして社会的存在となった人間において、その貧困は、社会の基本的な形としての「互酬的」な「交換のシステム」の齟齬、その結果としてあらわれると言うべきであろう。

天変地異による飢饉のため、社会全体に窮乏が及ぶ事も多々ありながらも、その場合で

¹ レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P41 講談社選書 2009年6月

² 小田亮 『レヴィ＝ストロース入門』P088 ちくま新書 265 筑摩書房 2013年9月

も個人においての個別の窮乏（欠乏）は、社会の格差の構造に従って進む事を、センのエンタイトルメント・アプローチは示している。飢饉の影響でさえもが社会関係の不都合を反映する。

このようにすでに文化状態にあり、そこから戻ることはできない人間において、貧困とは社会関係上の齟齬を念頭に考察されるべきと言う事が示唆される。言い換えれば、貧困とは文化的であって社会的である要求、交換関係と言う社会の「基本的な形」からの規定性があると言わねばならないのであろう。

③ 不平等問題

では、そのような社会関係上の齟齬は厚生経済学の領域ではどのように現れるのだろうか。相手のある社会関係、交換のシステムに向き合う個人におけるある種の劣勢として、相手との関係において生じる齟齬、劣勢、あるいは剥奪、不平等問題として、現れ、取り扱われているのではないだろうか。「互酬的ならざる関係性」である。

やがてその個人や集団における社会的不平等の具体的な様態は、社会の基本的な形、女性、文化、物資の交換関係における、非互酬性、劣勢の増大として、現れてくるのではないだろうか。あるいは交換システムへの参入資格に係わる、あるいは社会的承認にとって意味をなすと思われる、社会的な行動への制約であり、その結果としての生活財の不足、交換関係の齟齬、欠如をも伴ってくるのであろう。

あたかもタウンゼントの相対的剥奪指標における 12 の社会行動への制約であり、その時代における社会関係上の欠乏として、相対的剥奪、不平等問題と重なると思われる。

④ 死すべき運命を知る者、人間

そして同時に、「社会は、自らの死すべき運命を知る事を阻むものとして生じ、文化はそれを知る人間の対応として生まれている³。」とレヴィ＝ストロースはいう。死すべき運命を知る人間においても、常に生物学的要求水準が存在しており、その水準に至る事ができない欠乏（窮乏）状態は、その理由のいかんを問わず（文化的社会的な事情であっても）、生物個体の死をもたらす事は疑いようがない。この欠乏を貧困、絶対的貧困と言わざるを得ない。

人間生活、生命の危機にかかわる貧困の構造を考えるならば、文化状態に移行した姿の人間にも自然的生物学的な要求があり、同時に社会文化的な要求をかかえていると言う二つの要求の重なりがイメージされ、この二つのレベルの要求に対する欠乏（窮乏）が問題となる。概念的には明確に区分ける事ができる二つの範疇、自然と文化の双方からの要求

³ レヴィ＝ストロース 中沢新一訳『パロール・ドネ』P31 講談社選書 2009年6月

に対する欠乏（窮乏）、その状態を貧困として概念づける事ができると思われる。

この二つの要求は、厳然たる別個の範疇であり、概念としては二つに分けられるが、人間の生活の具体の一つ一つにおいて、何処までが自然で、どこからが文化なのか、それは混然一体と言わざるを得ないのであろう。自然と文化の二つを分けると同時に繋ぐ蝶番（蝶番）というべき位置にある、インセストタブー（婚姻規則）も神話も、人類にあまねく、普遍的に存在している文化的事実である。

⑤不平等問題の深化と拡大について

ところで人間生活における自然的生物学的要求においては、個体の命の存続と共に、種の継承という要求が、根幹的な要求に違いない。

生物種の進化の過程、その原初というべき真核細胞を形成する以前の生命体においては、生命体と物質の差異を「自己複製能力の有無」としていたと記憶している。そうであれば、生物普遍の要求、生物、非生物を分ける特質である自己複製、その要求を、現代の高度産業社会を生きる我々、ホモサピエンスは、どのように実現しているのだろうか。

社会文化的存在としてのホモサピエンスにおいては、婚姻規則を受け入れ、親族構造は婚姻規則と一体的と観察されており、親族、家族制度は各地文化の基底に位置すると思われる。そして次世代の育成や保育、教育とは、最も文化の領域にある営みとして、「次世代の社会化」と言う文脈でもあろう。

人間の子を産み育てると言う領域は自然的生物学的要求でありながら、近代産業革命が労働過程を共同体的家族労働から賃労働へと転換した事と対を成すが如く、子育て、保育も共同体から各家族の営みへと分離されている。特に戦後の共同体の解体を受けた日本社会では、近代家族は地域社会、親族共同体から分離され、核家族として次世代を保育する傾向を拡大してきた訳である。

そして今、先進諸国やわが国の少子化の流れは、自然種の一つであるホモサピエンスにおける、自然的生物学的要求でありながら、最も文化的社会的に実現される領域、次世代生成、育成の領域で、さまざまな齟齬が生じている事の反映とも考えられる。

生物としての自己複製、種の継承の要求と言う生物学的な重要場面における、社会文化的要求の重層性こそは、人類の生活問題における文化領域の深化・拡大を物語っているのではないだろうか。そしてその事は、貧困における自然的要求と社会文化的要求（不平等問題）という、人間生活に占める二つの要求の位相関係、その重層構造の有り様を指し示していると考えられる。

— 貧困の三角形へ —